

Junko Higasa

土曜日と重なった建国記念日の祝日、NPO 法人漱石山房主催・新宿区共催の「夏目漱石如月講演会（～時を越えて 受け継がれる心～）」に行った。会場に入ると、まず目に入ったのは壇上に掲げられたタイトルの書道の字体である。何か催し物があるとき、私は準備に関わる裏方さんの仕事に目を止める癖がある。幾つもの心がつながって、こうした催しが滞りなく行われるということをありがたく受け止める。

さて、漱石山房の講演会の企画は 8 年目に入るそうだが、まず主催者・楠川邦輔理事長の挨拶から始まり、相変わらず歯切れの良い美しい声の中山弘子新宿区長のご挨拶、続いて副理事長・長尾剛氏により、昨年 11 月 2 日に亡くなった漱石の孫・松岡陽子マックレインさん（享年 87 歳）と 3.11 震災犠牲者に対する 1 分間の黙祷が行われた。松岡氏は漱石の長女・筆子さんの次女で、津田塾を出たあと留学先のオレゴン大学にとどまり、名誉教授となられた。アメリカに住まわれながらも漱石山房復元にご賛同・ご協力いただき、同 NPO 主催で講演もしている。私も一度だけ拝聴した。続く本日のプログラムは作家・関川夏央氏による「漱石と子規の交友」と題する講演、元 TBS アナウンサー・近藤美矩氏による寺田寅彦作「夏目漱石先生の追憶」朗読、そして落語家・柳家権太楼師匠の「『漱石の愛した落語』より」であった。

関川氏は「子規がいなかったら、漱石は文学をやらなかったろう」と話された。松山の下宿先に押しかけた子規の影響で俳句を作るようになった漱石は、留学先から送る葉書に句を添えたという。

最初に留学途上の漱石の俳句が紹介された。当時ロンドンへ向かう交通手段は（日本にも船はあったが）小さな外国船だったのでかなり揺れ、その行程は 45 日から 51 日ほどかかったという。しかも航路は南回りなので暑かったそう。神戸・長崎を通過して日本的湿度が途切れる海域では、日本情緒が起こるすべもない。つまり俳句など頭に浮かばない。その状況で漱石は、高浜虚子にさえ浮かばなかったまともな俳句を詠んでいるので、これはかなり大した頭脳だということだ。またこの当時ロンドンへ行く海域はすべてイギリス領だった。そのため各海域を監視するのに交代要員を含めて多くの人員が必要になった。手が足りない。そこで日本が船を持っていたので、その監視の役目をやらせるために日英同盟を結んだそうである。

次に子規の興津移転騒動。漱石が留学を告げた明治 33 年 8 月 26 日の翌日、子規は興津へ療養に行くと言って、汽車を借り切るといくらかかるかという非現実的なことを聞いている。それは自分の周りの人間が次々に外国へ行くことに対して「英語が苦手でも自分なら適応できる」という羨望と無念が現れた出来事であった。

それから話はロンドンに着いた漱石に移る。霧の街ロンドンではなく、工場の煙煤ロンドン。今や公害であるが、当時はそれが産業発達のしるしで先進国の証であった。そして一つの驚きは、電車の中で皆が本を読んでいること。日本に電車ができた当時は揺れたので本を読んでいたら気分が悪くなったそう。漱石にとって「電車の中で本を読む」こと自体が先進国文明であった。

次に生活面に目を移すと、悩みはロンドンの物価が高いこと。漱石に支給された国費は月 150 円、現在の金額で 150 万円だそうだが、宿泊費を削らなければ生活が成り立たない。転居を繰り返す、動産として下宿の夜逃げにつき合わされたのは有名な話。そんな経済状況であるから「何かあった時のために全世界に友達を作ろうとする貴族

